「私たちの十五歳の頃」

東日本大震災から5年目に入ります。私たちの住む会津地域には双葉郡から多くの人が避難してきました。私たちは、生まれた土地に育ち住んでいますが、いま避難している人には、「ふるさと」はいまだ遠くにあります。

今回、大熊町地域学習応援協議会の事業として、大熊のみなさんの十五歳のころを聞き書きしました。それは、大熊の子どもたちに地域の事、そこに住んできた「思い」を理解して欲しかったからです。

この事業は、会津大学短期大学部の学生と、特定非営利活動法人寺子屋方丈舎のスタッフが聞き書きを行いました。大熊の子どもたち、そして、地域のみなさんの何らかの記録になれば幸いです。

主催：大熊町地域学習応援協議会
2014年（平成26年度）文部科学省
学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業（委託事業）

語り手
井戸川次雄さん
（85 歳・大川原1区）

経験を語り継ぐ大切さ

15歳のころは戦争の最中であった、と昔の記憶を探りながら語ってくださった井戸川さんご夫妻。

「女子と男子では違うかもしれないけど、僕らは軍人になることを小学生のころから教育されたんだから。高学年になると体育なんて今の体育と内容は全く違って、兵隊になっても勤まるような教育だったんですよね。尋常高等科になると竹槍なんてねぇ…。だから授業よりは体の鍛え方かな。丈夫になることを目的としてやらされたんでしょうねぇ」

「学校から帰ってくると家の手伝いだったな。宿題なんてもあんまりでなかったよな」

「若い人が兵隊にとられていないんだから子どもが家の仕事の担い手だったね。あの頃はガスもないから薪で風呂焚いてね」

「自分の希望があっても親の意見の方が強かったからなぁ。親の言うことを聞くしかなかったねぇ。うちのおやじはね、当時は百姓が一番安定してるっていうかな、食い物がない時代だったから百姓になるために農学校にな…」

「夢を持ってたって実現できなかったのな」

「今の親さんと違って理解ってのができなかったのかなぁあの頃は。僕らのまちは田舎ですからねぇ、勤めるところもなかったからね」

「事務室の隣が私たちの教室だったから、一人で廊下をあるってたら、「○○！戦争は終わったど！」って教頭先生が言って、「はやぁ」「負けたー」って。教室行って「戦争負けたってよ」って言って、みんなで集まってわんわんわんわん泣いてたわい。」

終戦間近の時期で軍事学校に入学することも叶わず農業の道に進むために多くの人が農学校に進学していったそうだ。将来の夢と希望を実現することが難しかった時代であったこと、終戦の記憶を二人で語ってくださった。

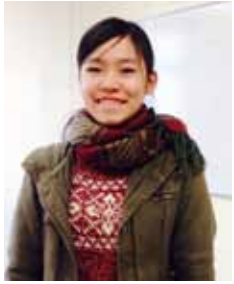
今、会津で避難生活をしている中学生に大熊町の伝えていきたいことはなんですか？という問いに、

「やっぱり地震になった、津波にあったそのことは忘れてはならないってことだな。自分が大きくなったときに子どもたちに伝えていくことが大切だと思うなぁ。」

井戸川さんご夫婦は戦争時の体験を私たちに語ってくださった。私たちは語り継ぐというバトンを受取り、次の世代に渡していかなくてはならないのだと思いました。自分の夢と希望を持ち、実現のために努力することができる時代に生まれたことに感謝し、実現させる努力をしていきたいと思います。

「大川原の子守唄、これみんな知らないんだ」と井戸川さんがポツリ。

『雨がザーザー降ってきた　洗濯物が濡れる
背中で赤子泣く　まんま焦げる』



聞き手
横田静さん
（会津大学短期大学部
社会福祉学科２年）

戦時中特に終戦の時代のとても貴重なお話をお聞きすることができ、これらを語り継いでいくことの大切さを実感しました。私たちは自分の考え、夢や希望をしっかりと持って、生きていこうと思います。